

昭和二十七年七月二十五日發行
第三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第一五六号)

慈光

第十四卷 第三號

目
歸命の一念……………近角常観…(1)
釈尊の生涯……………福島政雄…(6)

次
悲しむべきことを悲しまぬにて……………花田正夫…(12)
御正忌の法縁……………三瓶徳英…(15)

堂の鈴……………佐藤強三郎…(20)

袖にひしとすがりまいらするおもいをなして、後生たすけたまえとたのみもうす」などという著しいものもあるのである。これらは何うしても此方から無理だのみにやるようにしかとれぬ。が実はみな、今云う徹底の思いからお書きなされてあるのである。

これはただにお書き物の上ばかりでなく、蓮如上人の生活の上にそれが現われて来ているのである。親鸞聖人の物には、仏恩報謝などいうことはあまり書かれていないが、蓮如上人になると『改悔文』には、

もろくの難行難修自力のこころをふりすてて、一心に阿弥陀如来、我等が今度の一大事の後生、御たすけ候えとたのみもうして候。たのむ一念のとき、往生一定、御たすけ治定と存じ、このうへの称名は、御恩報謝とよること、御開山聖人、御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御働化の御恩と、ありがたく存じ候。このうえは定めおかせらるる御掟、一期を限りまもり申すべく候。思いきつて積極的にとしんと書かれてあるのである。

八二一Vこれなど大層自力的に書かれたように思われる。何やら信仰の上に、この掟なるものが一つひつつけてある様、真諦門の上に、俗諦門がくつつけてある様に思われる。ところがしからず、私共の経験で云うならば、我々この

はなくして、頂いた結果は、これになつてくるとの事を申ししたのであることを、取り違えぬようにして頂かなくてはならぬ。

東派、本派、すすめ方の長短

八二三V又余計なことを申すなれども、真宗中、東本願寺の方は、今の一念帰命に力を入れて話す風になつて居る。即ち受け心で話すことになつて居るのである。処が、西本願寺の方は、重に選択本願で説く風になつて居る。それ故、東派の話は『こう頂くのだ』『あ、思うのだ』と、大層むつかしい。そのむつかしくなつた極が、どれだけ聞いても御真実が蔭になつて、得られぬうらみがある。処が本派になると、それは無い代り『このままのお助けじや』『悪いままのお救いである』と、殆んどそれが一念に夜の明けた所がない程にとれる位にあるのである。

八二四Vそれ故、私の話が、どちらかというとな派の方に迎えられる。それは私があまり一念帰命を言わないからであるが而もそこは迎えられる、私あまり満足できない。

私の『悪いままじや、このままでじや』でなく、その悪いが哀れで何処までもお見捨てなき御真実の故に『ああ有難や』と、満足の受け心が言いたくてならぬのである。

ところが東派の人には、近角のはお慈悲じや〜と、慈悲

広大な御真実に値わらずば、今頃どうなつて居るか分らぬ者なのである。この世ぐらいなことでもなく、未来永劫、どうなるやら分らぬものであつたのに、この不思議のお救いにあいまいらせたということ、これ全く仏の大慈悲、御開山聖人御出世の御恩、この御恩に向いては、我々どうしてもおよそにあるべきでない、なつてくるのである。

故に蓮如上人のこの類の仰せは、総て、あゝせよ、こ味せよと、我等をしぼられた教ではなく、むしろ信仰の徹底は、斯くの如き働きとなつて実人生に現われてくるのである。この事を示し下された教であることを忘れてはならぬのである。

八二二V故に、要するところ、帰命は、命を捨てての帰命でもなく、又命に帰るの帰命でもなく、如来招喚の勅命の遣る瀬なき御真実が私の心に届いて下された一念に現われてくる、一念帰命である。故にこれをば覚如上人は『執持鈔』に

善知識の言葉のしたに、帰命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆のおわり、臨終と思ふべし。

と知らせ下され、又聖人の『正信偈』には

能く一念喜愛の心を發せば煩惱を断せずして涅槃を得と。しかしながら、これがこちらから『有難く思わんならぬ』又『御真実を頂けば御礼を云わんならん』というのでばかして頂きどころが無いとように思われる。それは受け心は、徹底の自然の結果で、それいうと却つて御真実を申すに妨げになるから、私はあまり申さぬことになつてあるからであるが、しかしこは大切な点故、はつきりして置かなくてはならぬ。

八二五Vいま我々の問題は単にこの人生上のことぐらいに止まらず、命終れば、永劫に闇黒に趣かなくてはならぬ私を、それをお見捨てなき御真実のために、それが意外にも、仏の世界に迎えられると成る、というこの著しき問題であるのである。それ故に、これが真に仏の御真意に夜が明けたでない限り、こちらの思いなしや、解釈のついた位に、安心のされよう筈がないのである。それ故極樂は樂しむと聞いて参らんと思っているのでは往生は出来ぬ。極樂は真実報土と申して、このお見捨てなき御真実より現われた国土であるのである。極樂を願土とあるは、この本願より出来た国だからである。それ故、その根本たる本願真実のお恵みに夜が明けて、初めて私の心に頂かれた処が、一念帰命の徹底となるのである。

八二六V而してその徹底の有様は

『この長々迷ひ隔てて居る私を、その隔ての止まぬを哀れみて、それ程のお心でお向い下さるのであつたか、思召しの有難や』

共仏教徒はせめてお釈迦様と申したらどうでありましようか。釈尊と言えは一番よく当り、又釈迦牟尼世尊と申し上げてもよろしいのでありますけれども、ちつと長いものでありますから言葉を私考えております。釈尊にお呼びかけ申すような時には世尊と申し上げるのが簡単な言葉で、非常にいい言葉のように感じております。まあ兎に角、釈尊と申しますれば釈迦種族の中で尊い感じをお聞きになつた方と言う意味になりますから、これは又いいと思つていただきます。その尊い御覚りの記念日であります。でその御覚りのことから申し述べて見たいと思つてあります。これは私少しでも読みましたものでは、昔のものでは井上哲次郎博士のお書きになりました「釈迦牟尼伝」というのがあります。それから常盤大定先生がむしる文学の方面から御覧になりました釈尊の伝記、それも少し読んでみました。その他にはビルマの方で伝わつたと言うビルマの仏伝というのが日本語訳したのを持つておりましたから、それも飛びくには読んで見ました。ところが最近これは新しい方でありましょうか、大類純と言う方が「釈迦」と言う題で本を書いておられます。これを最近手に入れて読んでみますと、これは、大分高級な釈尊研究と言うのでありますが、研究というのは当らんかも知れませんが、釈尊のことを述べておられる大分高級な新しいものであります。これを開いて

苦行のこと

と言うような美文で始つております、あれを読みましたがそもその始まりで、お釈迦様とも何とも私そんな感じの無い時代に文学に引かれて読みましたものであります。

まあ、それやこれやを考え合せますのでありますが、釈尊の成道という事はどんな事かと言うことから申し上げてみたいと思ひます。これは釈尊の苦行時代、多少説が分れるようでありますけれども、この御本、大類純著「釈迦」では六年となつております。六年間苦行をなされた雪山、ヒマラヤ山であります。それから黒山というのはヒマラヤ山の麓にある森林地帯を黒山と言うのたさうであります。そういう所で修行をしている人を師として六年間苦行をお続けになりました、どうしても釈尊のお求めになりますような心が開けない、苦しみに苦しんでおいでになつたのであります。それから何でも琴の喩、これは釈尊が後にお話しになつたのであります、つまり琴の糸というものをあんまり引張り過ぎると本当の音は出ない、かと言つて緩め過ぎると音は出ない。丁度いい所に締めて張らなければ琴の大事な音というものは出ない。そう言う喩にありますがように、苦行を続けるという事は琴の糸を本当の音の出ないように張るような事であると。これではいけないと

あちらこちら読んでみまると、新しく教えられるところがあるのであります。それから山辺智学先生が「仏弟子伝」と言うのをお書きになつています。これ亦面白いものであります、釈尊のお弟子の舍利弗・目蓮と言う方々を始め、色々な方面のお弟子を、やつぱりよく原典をしらべてここは何の御徑にあると言うことをはつきりお書きになりましたものであります。それも所々読んでおります。それから高楠順次郎先生のこんな薄いものであります、これは「仏伝」という題で大変よいものであります。これを繰り返して読みましたし、それから同じ高楠先生の「釈尊の生涯」、これは青年相手にお話しになつたのが本になつてそれに註釈を加えておいでになつて、それから釈尊の生涯に就いての色々の彫刻やら絵やら写真が一ぱい中にはいつております。それは今うちに持つております。そう言うものを拝見した程度であります。もつとも、一番始めにお釈迦様のことを何で読んだかと申しますと、高山樗牛の「世界歴史譚」と言う昔々出ました青年に読ませる為の本の第一編「釈迦」それが一番始め、昔々のことであります。

「三千里外道相距り、三千年前時相隔つ、靈鷲の山、月長えに明に、恒河の水、昔ながらに流るれども、人は生死の巷に迷い、世は盛衰の道を離れず。然れば祇園精舎の花、何時しか色あせて、仏陀伽耶の塔、石に苔あり」

言う事を感じて苦行の人々の所を別れて、あのニレンゼン河と言う河に沐浴されたのであります。何でもすつかり痩せ衰えて、御徑にはおなかの皮と脊中の皮とが一つにつくようになっておしまひになつたとあります。あの出山の釈尊の彫刻のお写真の中には肋骨が一ぱい出て、本当にすつかりやつれた御姿であります、つまりそう言う御姿でニレンゼン河にはいつて身を清められたけれども、上つておいでになる気がない。それを引き揚げてもらわれた。それからそこにスジャータと言いましたか、娘さんが牛乳のおかゆでありましょう、乳糜とか言う、それを差し上げた。それをお上りになつた。釈尊と一しよに苦行を続けておりました五人はこの有様を見て、これはゴータマは墮落したと、ゴータマというのは釈尊の修行中の御名たさうであります。こんな墮落したゴータマとはいつしよにやれないと考へて、五人は見捨ててロクヤ園に行つて相変らず苦行を続けている。

釈尊の方は後に菩提樹と言われるようになった大きな樹の下に座をかまえて、吉祥草とか言う草をもらつてその草を敷いてそこにお坐りになつた。自分は覺りが開ける迄はこの座を動かんとする御覺悟でお坐りになつた。それから段々成道と言う事になりますのであります、七日間と言うことになつております。

降魔のこゝと

そのいよいよ御覧りが開ける前に、御存知のように悪魔が色々誘惑をする、押し寄せて来る。その悪魔をとうとう降服おさせになつた降魔に続く成道と言う訳であります。その降魔と言う場面が私非常に引かされる所であり、悪魔が最初には手柔らかに誘惑してやろうと言うので、あの三人の若い可愛い美しい女性を目の前に出して踊をおどらせるやら、媚態を尽くさせる。それを染愛・能悦人・可愛楽と言うような名前になつておりますが、染愛は愛に染めるといふのであります。能悦人は能く人を悦ばせると言う意味であります。可愛楽は可愛い姿で楽しみを与えるという意味かも知れません。そう言う名の三人の若い女を目の前に出して誘惑させようとする。ある伝えではその三人の内一人はヤシヨダ姫の姿を目の前に見せたのであると言う事になつております。これはなかなか考へさせられる事でありまして、私あの臼杵祖山先生から色々仏教のお話を承つておりますが、釈尊と言う方は決して人情も何も無い冷いお方で妻も子も棄てて修行に出られた、そんな方じゃない。釈尊程人間というもの深く感じられた方はない、と言う事をよく仰言つたのであります。が、実際その通りであつたと思ひます。でありますからそこにヤシヨダ姫の姿を悪魔が見せたと言う事になつてお

りますが、その悪魔は煩惱そのものでありますから、いよいよ覚りをお開きになる前にやつぱり見捨てておいでになつたヤシヨダ姫の暈が釈尊の心の中の問題になつて、最後の執念がそこにあらわれて来たものであると、こう考へてもいいようであります。併し悪魔がそういう風にして誘惑しようとしたけれども静かに坐つておいでになる。釈尊が少し目を開いてじつとその女を御覧になると、今まで若かつた女が忽ち醜いお婆さんになつてそれからやがて白骨になつてしまつたと言うような事になつておりますが、それはなかなか私共として考へさせられる事なのであります。私なんか若い時にやはり女にひかされたりたまさかりした人間でありまして、そうすると自分を保護するつもりであつたのであります。街を歩いていて女の人が向うから来ると「百年の後皆枯骨」と言う事を考へ考へ歩いたことを思い出すのであります。併しそう言う事を言つて自分の迷の心を押えようとしただけであります。釈尊のようにじつと御覧になるとお婆さんになつて白骨になつたのであると、ここはなかなか、そう行かぬ。本当に釈尊の覚りをお開きになつた心持からそういう場面をそういう姿であらわしたのであると言う事を思ひますのであります。

それで魔王の方ではこれはシマツタ、柔い方の誘惑では駄目だから今度は強硬な攻撃をやるうと言うので、悪魔の全軍を率いて攻撃を始める。これは過去現在因果経でありう事が煩惱として押し寄せて来る。それから他の連中は槍を持つて目がけて来るとか、弓に矢をつかえて来るとかやつてゐる。けれども無論菩提樹下の釈尊はじつと身動きもなさらない。そうすると悪魔が槍を投げたり矢をはなつたりしますけれども、その槍なり矢なりが釈尊の上に来るとすつかり美しい花弁になつてハラハラと金剛座の所に振りかかつて来る。そしてどれもこれも釈尊の心を動かさないと云うのであります。そこで魔王が怒つてこれじやならんと言うので大風を吹かせて見ても揺ぎもなさらぬ。大水を出して見ても釈尊の金剛座だけはちつとも濡れもしない。こういう有様である。

地神の証明

ますか、それに面白く書いてありまして、押し寄せて来る悪魔の内には、枝葉の繁つた大木をうしろに背負つて手に黄金の杵を持つて迫つて来る、それから他の者は全身火焰に包まれ火を吐くようにして迫つて来るのがある、それから手の爪なんか鋭く長く伸びてやつて来るのがある、唇が長く下の方に垂れたのがやつて来る、そういう色々の事が言つてあるのであります。空中をくるくく廻りながらやつて来るのがある。それを一意味を考へて見ますと、大きな木を背負うて黄金の杵を持つてと言ふのは、その大樹と言ふのは傲慢をあらわす、黄金の杵と言ふのは財産欲をあらわす。手に一ばい鋭い爪がはえていふと言ふのは色々の物を掻き集めようと言ふ欲をあらわす、その欲と言ふのは愛欲も加わるのであります。それから下まで垂れ下つてゐる唇は愚痴の煩惱をあらわす、それから空中をくるくく廻つてやつて来る、それは頭ばかり廻つて実際は何も出来ない、物事を頭ばかりで処理して行こうと言う、そう言うやつぱり煩惱、と言ふのは仏教では所謂哲学の思惟世界もやはり迷の世界であると言ふ風に徹底的に見られるのでありますから、この空中を転々として来ると言ふのは、そう言う頭ばかり高遠な事を考へて実際は駄目であると言ふ事をあらわしているのである。まあこういう色々の事を考へられるのであります、そう言

魔王がこれではいかぬと思ひまして釈尊の所へ来て「お前はこの座に居るべき人間では無い、この座を立ち退け」と言ふと、釈尊は「この座にふさわしいものは唯自分一人である。自分は決してこの座を立ち退かない」と言う事を仰言つて大地をさされる。皆様御存知であります。佛像の降魔の印と言ふのであります。結跏趺座して右の手を膝の少し前に出すようにして伸べておいでになる。あれが降魔の印、悪魔をお降しになるお姿と言ふのであります。それはその手を以て大地をさして「地神よ証明せよ」

と云うような事を仰言る。そうすると大地の神が現れて来て、積尊のお心持を証明する。悪魔はとう／＼駄目になつて悪魔の軍勢はちり／＼になると云うのであります。そこに非常に大きな事で面白い事は、悪魔の軍勢と言うものが消滅したとありますけれども、消滅したと言うのは方向転換してすつかり積尊に従いまつたと言う事にかわつて来た。だから今迄は賊と言ふ立場にあつたものが、今度はあらためて仏法守護の者共になる。そう云う風に転じて来るのである。こんな解釈を見ますと、成程その通り本當に仏法と言ふものは、私共の煩惱を撃つて殺してしまつて言ふような事でないに、煩惱全体にすつかり方向転換させる、そう云うところに積尊のお覚りと云うものがある。それから私として考えます事は煩惱の悪魔はどこ／＼までも積極的に向つて来ますけれど、積尊は徹頭徹尾じつと座つておいでになる。積尊の金剛座下に於ける御態度と言ふものは、消極のお姿であります。向うから手を出すからこちらからも向つて行くと言ふ事ではなくて、じつと座つておいでになる。その内に悪魔の方が駄目になる。そう云うところに大事な意味がありますかと思つてあります。

ファウストとの比較

それからもう一つ非常に面白いと思つて居るのは、今の降

に持つて行くかとする時に、教会の鐘が鳴り響き、讚美歌の歌声が聞こえて来る。それに聞きとれて思わず毒を飲む事をやめる、そしてこれからあらたまつてメフィストに引つぱられて、一人の純潔な処女を散々誘惑して獄中で死せしめると云うところまで行く。そう云う方向に向つて行く。丁度積尊の菩提樹下での御覚りと反対の方向にファウストの第一部では向つて居るのであります。そう云うとこ

魔の印で地神をお呼び出しになる。つまり一切煩惱が方向転換して統一された相が地神によつて証明されますわけでありませぬ。それを私はゲーテのファウストの始めの所と較べて見るのであります。ファウストが大学者になつて、学問という学問を皆研究して究めて見たけれども、自分の心の中はちつとも満足しない。自分は魔法まで研究したところを以て、魔法で大地の靈を呼び出すのであります。すると大地の靈がすさまじい姿であらわれて来る。そうすると自分で呼び出しをおきながら大地の靈をまともに見る事が出来ない。怖いのであります。そしてやがて大地の靈引つ込め／＼と言ふことになる。一体大地と言ふものはその場合何であります。ファウストは学問ばかりやつて人間としての体験と言ふものは先ず無いようなものでありますから、そこに何となく物足らんところがある。かと言つてその人間としての感情とか本能とか言ふ事の塊のようなのが大地の靈としてあらわれて来ると、それをまともに見る事が出来ないような弱い存在がファウストである。それと較べますと積尊が地神を呼び出して、その地神が一切煩惱がこの積尊によつて統一されていると言ふようなところを証明すると言ふ事になりますから、天地の違ひである。ファウストは堪りかねて、その後毒を盃についでそれを飲んで死のうかと言ふので、その毒の盃をもう少しで口

悲しむべきをこと悲しまぬにて

有名な歎異抄の九条に、

唯円「念仏は申しますもの、それにつれての喜びの情は微温的なものでございまして、とても踊躍歡喜などといふ、飛び立つほどの嬉しさも感じません、これはどういふいうものでございましょう。」

と、おそる／＼おたずねに及びましたところ、

聖人「親鸞にも合点が行かなかつたことであつたが、唯円房、そなたも同じ思ひであるな。」

と、思いもかけず、聖人は唯円と同座して下さつて、「よく／＼考えて見れば、天に踊り地に躍り、手の舞

ろを較べ合せますと、積尊の御覚りの力と言ふものは、つまり大地の外まで徹して、と言ふのは煩惱の底の底まで徹して一切の煩惱が撲滅されるというのでなくて、転換せられて、そこに統一せられて、今までの煩惱としての働きては無くなる。こういう所に何とも言えない積尊の御覚りの御姿と言ふものがあると言ふような事を、先ず感じますのであります。

花田正夫

い、足の踏むところも知らないほどに喜ぶべきはずであることを、よろこばないので、いよく／＼もつて撰取にあずかることは間違いないと思われるがよい。」

との破天荒な聖人の断案に果然とする唯円房に、

「一体、喜ぶべきはずのこころを抑えて喜ばせないのは煩惱がつきまといつて居るせいである。」

「ところが阿弥陀仏におかせられては、このことを前もつてお見抜きになつていらせられて、私共を呼んで煩惱にかけては何一つ不足なくそなえて居る凡愚者と仰せら

れたことであるから」

と煩惱に相応して下さる本願の意趣を

「大慈大悲の撰取の本願は、こうした私共の為であつたのだということが知らされて、ます／＼頼もしく思われるのである。云々」

と、聖人の内心の全体を打ち明けて下さつて、そこに輝やく仏願のまことをそのまま述べ下さつたのであります。

歎異抄を読んでこの聖人の仰せによつて、唯円房を先達として、数限りのない人々が、廣大無辺の願海に引入され、とけこまれたことでありましょう。唯円房への仰せが、そのまゝ私共への直々の仰せとなつて「頼もしさ」を味わわせて頂くことであります。

以上のことをかね／＼池山先生からねんごろにおさとし頂いて有難く味わわせて頂いて居りましたのであります。が、終戦の前頃に、近角常音先生から

「唯円房は、喜ぶべきことを喜ばぬにて、と聖人に打ち明けて不審をおたずねしているが、自分は、悲しむべきことを悲しまぬ奴である。云々」

と聞かされました。そのお言葉が不思議に耳に残つて、謎となつて居りました。そのうちに先生も亡くなられ、歲月も空しく流れ去りました。

ま／＼にせられていた時、警察問題が起つたので、丁度よい機会とばかり進んで取調べを受けられ、警察の手で白黒を積明して貰いたいと願われたのでした。

然し取引先が全国にあるので、その調査は大変なことで、とう／＼三月もかかられたわけでありす。その間Nさんは、食物など充分に差し入れて貰えるし、独りの時間が与えられたので、信仰書などをゆつくり読めるなど、まことに心たのしい月日を過ぎられたのであります。

こうして、身心共に元氣一杯で無事にいられたのであります。が、それについても、反対派の人達が虎視眈々と何時も欠点探しをしていくれたので、不正事件になるようなこともしないで居られたことを喜ばれ、苦しうでなかつたなら、つい心の油断が出て違反もしていたかも知れないと自身を省みられて、反対派の人達をうらみ、憎むという心も消えて、平穩な気持で居られた由であります。

事が落着いてS先生を初め、東京の近角先生を訪ねられると、苦しかつたらう、淋しかつたらう、と種々慰めて下さるのであるが、N様としては気持のよい生活をしていたので、その御心尽しがしつくり頂けない心地でいられたが、そのうちに「自分がこうまで御心配をおかけ申しているのに、それを平氣でいたというのは、全く悲しむべきこ

ところが本年二月の初めに高松市のN様が草庵を訪ねて下さつて種々お話し下さつた時、はからずもこの謎をすつかり解いて下さつたので嬉しい余りにその顛末を誌します。

N様は、明治の朱頃、夏季求道会が東京の求道会館で催されていた時、S先生の御手引きから、近角先生の御教化を蒙られた方でありす。

さて昭和十四、五年頃、戦争も次第に拡大し、国全体が戦争目的に集中された頃、N様はお父さん譲りの水産会社の社長をしていられました。ところがその会社も統合のやむなきにいたつたのであります。が、その時漁業組合の人々が、一方的な統合を主張して来たので「国家目的のために統合することはやむないが、筋が通らぬ統合には賛成出来ぬ」と断乎として拒否せられたのです。

そうこうして居りますうちに、漁業組合に不正事件が摘発されました。すると反対派の人達が、水産会社にもきつと統制違反があるに相違ないと邪推して、種々なデマをとばし、それを警察に告げるなどしたので、調査のためにNさんは三ヶ月も警察に留置せられたのでした。

これは全く迷惑千万なことでありましたが、N様としては、反対派の人々が陰で悪評をしていることはかねて耳にして居られたが、それを弁明するのも不本意なので、そのとを悲しませぬ煩惱の所為であつた」と知れ、その煩惱を「かねてしろしめして下さるお慈悲」ということが、何とも云えず有難く味わわれた由であります。

そのことを、常観先生の前で述べられると、先生は常音先生をもその席に呼ばれて、共々によく聞きとつて下さつたとの事でありす。あたかもそうした後、名古屋へお出で頂いた常音先生は私共に「悲しむべきことを悲しまぬにて」との信味をお領け下さつたのであります。

以上二つによりまして、煩惱に覆われて、しびれきつた私共は、よろこぶべきことも喜ばないと同時に、本当に、悲しむべきことを悲しめぬ、鈍感無恥の姿の全体が照らし出され、その全体、裏も表も、上も下も、内も外も、すつかり「仏かねてしろし召して、ことに哀れみまします」大悲の廣大無辺に驚歎申すばかりであります。

それを、ともすれば、自分の鈍感さを棚にあげて愛別離苦にあうても自分は泰然として居られたと誇り、重病と宣告されても割合に取り乱さずに居られたこれも聴聞のお蔭であるという風に、浮調子な空転をし易いものであります。これ等は皆、悲しむべきを悲しめぬ、同時にまたよろこぶべきことをよろこべぬ、逆謗の死骸の狂態と知らされ

ては、仏前にその一切をあげて慚愧の外はありません。

このことは禅の立場からも同じかと思えます。それは、明治の劍豪で禅の極処を得た山岡鉄舟翁の辞世の句に

腹はつて寝られぬままに明け鳥

とあります。胃痛で、最後に腹膜炎をおこし、腹がパンパンにはつて、横臥も出来ず、布団にもたれて、坐禅をしたまんま最後の夜を明かされた時の句で、やがて息が絶えられたのであります。すると門人達が、どうもこの句は平素の先生らしくない、これでは弱気すぎる、発表はさしひか

御正忌の法縁

昭和卅七年親鸞聖人御往生の御正忌報恩講が、本派本願寺始め、全国末寺で、厳肅に七鳳夜の御法要をつとめ、有縁の御同朋と共に宗祖聖人の広大な恩徳を偲びました。

一年中で一番寒い真最中、九十の御高齢で御自分の家なく、天台宗の御寺の住職の御弟、尋有僧都のお寺の一室で御病床に伏したまい、二三週間の御わずらいで、遂に御往生遊ばされたと聞かせて頂けば、炬燵を離れて、近くのお

えようと云つている時に、鎌倉から走せつけられた某禪師がこの句を見られて

「さすが鉄舟居士である。ここまでさとられたか」と随喜せられたので、これを辞世として発表された由であります。自分の一切を打ち明けて、坦々として逝く居士の面目、平凡に帰りきつて門人達にその心境が知れないまでに到達していられる信境に襟を正さしめられます。

「仏教は健全な常識なり」と近角先生は信仰余蘆に述べていられますが、全く至言であると思ひあわせて頂くことであります。(二月十五日、涅槃会。)

三 瓶 徳 英

寺の本堂へ参らねば相済まぬ心になつて、人々は御正忌法座に参詣するのであります。

私は今年八十二になりました。元來愚鈍極悪の横着者であります。隣村、波積願寿寺の法兄が、十四日から三日間来て話せとのことで、下手な話でもよければと、承認を得て、今生最後の御正忌と思ひ、参らせて頂きました。

お話をする依処として、大経和讃の第十九、廿、廿一、の三首を拝読して御縁を結びたいと考えました。

○善知識にあうこともおしうることもまたかたし

○念仏成仏これ真宗万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして自然の浄土をえぞしらぬ

○一代諸教の信よりも弘願の信業なおかたし

難中の難と説きたまい無過斯難とのべたまう

右の御和讃について、潜越極まること、現罰を蒙ることながら、次の様なことを書いて皆様の御叱りを待ちます。

一、救われた人大首宣布救われる人スタコラサツサ

暗い名利の山奥迷い声をきいても出てこない。

二、親の苦勞の財産全部お前にやるぞと親爺が言うに

理屈云わずに貰えと書いて、死んだ兄貴の七百年。

三、すべて教は千万無量自力修行や現世のいのり

信は易いが行苦難他力難信たた報謝。

尊意をけがし破損することを恐れながら、三日間出放題の感想を云わせて頂きました。

念仏成仏が一番有難く、今日今時、吾々凡夫をして絶対に安心し満足せしめ、仏の地位にまで引き上げて下さるために、四十八願を建て、本願が成就したと大無量寿経に説いて下さり、十八、十九、二十の三願で十方一切の衆生が

救われることになつた。この三願には三機三往生の因果が付き纏い、親鸞聖人御自身三願転入遊ばされた事も仰せられました。

我々は常識進展の経路として、自力修行の時代、半自力半他力の時代は行詰つて、行者は卒倒し一分一厘動けぬ身となりて、あせり恐怖暗黒にもだえ狂乱するを見て、大慈大悲の親が寄り添い、可愛想に思召し下され、屹度助けてやる、ドコ／＼までも見捨てぬとの御誓いが念仏成仏これ真宗であります。

それからのちは総てが報恩感謝の活躍で、政治も道徳も正道を進むべきであります。

飄つて現今の世相を顧れば小は個人の生活より大は全世界各方面に涉り、平和々と喚びながら表裏不相応の事ばかりで充たされて居る。青少年者の犯罪が多いと云うが、之は壮老年者の悪質が多い為ではあるまいか。

ここに些細な一例ではあるが、私が今年御正忌に参つたお寺から七八町隔つた処に三々川温泉場があつて、私は何時も入湯に行き御家族とも入魂になり、時々奥さんが用事で出られる時私に留守番をたのまれ湯銭を受取る時、弁当持て二階で休み数回入浴して稀に二回分を払う人あり、普通一回分の金を払い先ず入浴して二階に上り、テレビを見炬燵にあたつて一二時間後又入浴してサツサと帰る人が男

にも女にもある事を屢々感^{しげく}じました。最も悪質者は金を払わずに長時間入浴してそのまゝ帰る人もあつたようでした。或日夕方小学校二年生位の男児が泣きかけて番台の私に向つて、おじいさん一回分八円返してくれ、二階のおじさん達は一回十五円払つただけでテレビを見、二度目に這入つて金を払わずに帰つたと口惜しそくに訴えるのであります。その時私は忿懣^{ふんまん}といじらしい思いに涙が出ました。この幼い子供の純な心をゆがめ悪の種を植付けたのです。不良小年をつくるのは不良老壮年である。道徳教育の為に学校に修身科や倫理科を設けるだけでは駄目です。大人の道徳教育が最急務で、之は宗教信仰により真宗信心に徹せしめる事のみであります。

十五日は成人の日、本日祝賀式に列した若人達の幸慶を希念します。よい日本人になつて下さい、よい善知識を求めて下さい。私は去る三十三年慈光誌十巻の三号に中島忠博さんの事を掲載して頂きました。概略を少し申せば、長崎県瀬戸町の農家に生れ、早稲田大学理工科に入り、アルバイトなどして立派に卒業し、直に飛行隊にとられて太平洋戦争の様性となられた。頭脳明晰で、親鸞聖人の信仰に徹底したよき青年であつた事が惜しく悲しくて忘れる事が出来ません。若い人々、どうか聖人の教を聞思して下さい

はり上げて、ハラノタツピンボオくと言つて歩く。之は可笑しい、本当の事を聞いてやろうと思ひ、二三間遅れて二タ町ついて歩いたが、買う人はいないから夕刻別院に帰り、丁度折よく出入の肴屋さんが居たから只今の事を言うと、居合せた四五人が大笑をする。肴屋さん曰く、それはあなたの聞き違いだ、ハラノタツではない、タラのタチだ。鱈の子だ。ピンボオではない、ギンボオだ、サアベルとも言う太刀魚の事だと聞かされ、そうであつたかと思ひながら、私の聞きようも悪いが婦人の言ひようも悪い。もつとゆつくりハッキリ言えは分るのと言つた事がありました。仏法は聞きそこないが多いようです。

十六日は晴天で七百一年の今日、寒に入つてから十一日の正午、宗祖聖人は御往生遊ばされた。

一代諸教の信は聖道門自力願求の信で、信じた後、成道の為に難行苦行をつとめ抜かねばならぬ。弘願^{くわん}の信樂は浄土門で大無量寿経第十八願の他力金剛の信、願力廻向の信心で親鸞聖人は「それ信樂を獲得する事は如来選択の願心より発起す」と仰せられ、如来より賜る信心で信の中に行の全部が成就完封せられ、信後はただ任意に報恩感謝の活動あるのみであります。

正信偈には、弥陀仏の本願念仏は邪見憍慢の悪衆生信樂

い。

善知識とはよき事を教え幸福にお導き下さる恩師で、私は善知識近角常観先生のお蔭で私のシブトイ心、極悪邪道を知らせて頂き、生きた仏、生きた親鸞聖人の御声が聞こえた気がして有り難かつた事があつたけれ共、段々本性に戻り、怒り腹立ちそねみねたみ心が起りますが念仏は時々出て下さい。近角先生御教訓の中私の胸に残る御言葉に、他人が悪く言うたとて悪く思うのは、わるく思う方がわるい、これは誠にひどい言葉であると仰せられました。深く考えるべきであると思ひます。教わる人、よく聞く人は沢山あるけれども、正像末和讃に、

真実信心うることは末法濁世にまれなりと
恒沙^{じやうさ}の諸仏の証誠^{じやうじやう}にえがたきほどをあらわせり

と仰せられてあります。七高僧の第四道禪師は安樂集に説聴^{せつちやう}の方軌を説かれ、説者は医王の思をなせ、楽しんで法を説け等と、又聴者は大病の想をなせ、渴したる時水を頂く想をなせ、善知識と聞かば千里の遠きも辞せしと思へ、これは救わる人である。憍慢や懈怠の人は浄土の法門は信じ難し等の御さとしがあります。

世の中には聞き違いがあります。私の聞き違いの实話ですが、私がかつて函館別院におりました頃、ある日散歩に出ますと一人の婦人が天びん棒の前後に着籠をつるして声受持すること甚以て難し。難中の難これに過ぎるものなしと。

大無量寿経には、当来^{きやうどうめつじん}の世に経道滅尽の時が来ても弥陀の本願他力救済の法は世の中に残る。真面目な浄行の菩薩でも得難いのに、我々愚悪人が聞信して救わる事は善知識に遇う人々である、と説かれてあります。

他力信心の六つかしいのは、我々凡夫が小智小慧小策略に明け暮れて、自力我慢の殻に閉じ籠つてゐる所以であります。私が去る二十五年八月盆法座の時數異鈔十三章について話した時、元飛行少佐であつた瀬尾信義さんが宿善到来とも言うものか非常に感激せられ、頻りに念仏して、私の愚悪我慢の心の戸を開けて下さつたと申されたので、私は、イヤイヤそれは仏様である、親鸞聖人であると言つて別れましたが、一昨年瀬尾さんは五十余才で念仏しながら亡くなられたと御遺族から通信を頂き痛惜にたえませ

ん。
近年新興宗教がハビユルと言つが、これは最近の出来事で本年になつて或日檀家の報恩講に招かれて参りました。家の上の間の仏壇が綺麗に荘厳されておりその傍らに高い机の上に神棚を置いて立派に飾られてあつて異様に感じました、この家の主人は至つて真面目な律義正しい人で社会的信用の高い方ありますが、曰く、昨年の末頃山を買

明日から樹木を伐る事にした、今朝仏壇を飾りながらフト思ひ出したのは子供の頃年とつた人達の話に、三十三間堂の柳の話、又この村のある木挽さんは古い大木を伐りその精に崇られけがをして死に、妻子も病死して一家は絶えた等聞いた事を思ひ出し、明日から伐る山には古木も大木も沢山ある、もし精があつて崇られたら大変だ、この際神官さんに頼んで神様に御願いしておこうと思ひ立ちましたと言ふ事でありました。その夜報恩講で近処の人三十人位参詣され話したのでありますが、私は慈光誌四卷十二号に神棚に就いて拙文を掲載して頂きましたが、神は不浄な人家へお迎えせず淨域の社殿に鎮座して頂き、信者は其処へ参詣すべきであると思ひます。

歎異鈔第七章に念仏者は無碍の一道を行く人で、天神地祇にも敬愛され惡魔外道も活動を妨げ得ぬ大善念仏に安住する仏の子だと仰せられてあります。念仏者も業の発露によれば大罪を犯す事もあるけれども、如何なる者も救われる弥陀の大慈悲に包まれし念仏者なれば恐れ心配する事は要らない。

池山先生は、たのまるる唯念仏の我にありざるべき業はさもあらばあれと咏まれ、

近角先生は、あと戻り／＼して迎るらん甲斐なき事に心惹いてと仰せられました。

堂の鈴

五智の浜 二

翌日の夕方、信哉はお藤にすすめて、高田市へ遊びに行つた。ここは有名な降雪地、日本スキーの発祥地でスキーに関する陳列館がある。春は高田城跡の桜が名物である。

そして三日目には上杉謙信公の居城、春日山城跡を訪れた。その次の日は、北陸の難所、親不知を汽車の中から見た。そこは海岸の絶壁の下、唯一人しか通れぬ細い道で、波が道を洗っている。

信哉「ここは夫不知、妻不知ですね」と云つて二人で笑つた。お藤は心に……八夫不知の道は日本海の断崖にあるばかりでなく、畳の上にもある。人から見れば、平和な家庭にも、夫不知、妻不知の難所がある。ああ、心の平和も、心の苦悩も、人からは見えないであらう……。

その後二日置いて、信州柏原へ一茶の跡を訪ねた。

われと来て遊べや親の無い雀

やせ蛙まけるな一茶ここに在り

など、一茶の俳句を思出した。

六日目になつて、

私は只今フト、火と水の中行く私の業なれや念仏々々細道辿ると、言うて見ました。

今年の御正忌は無事健康で終らせて頂きましたが、来年の御正忌は多分彼土から還相撰化の御手伝をさせて頂く事でございましょう。今は亡き善知識法悦の御同朋、亡き両親妻弟、現存活躍の御同朋等を偲び、念仏させて頂くばかりであります。南無阿弥陀仏。三七・一・二九稿了

清沢先生法語

我もし如来の御慈悲を信せず、我身の責任などを論ずるならば、百度切腹するも、わが責任を塞ぐ能わず。されど如来の指導を信したる身は、この如き責任煩惱の苦痛を免れ、唯何事も如来の他力にまかせ奉つて、日送りすることの心安さよ。

蓮如上人が今の世に生れ、今日の言語にてお話し下さるならば、「仏法は無我にて候」と仰せられず

「仏法は全てを如来にまかせ奉つて、自己は全く無責任にて候」と仰せらるるに相違なし。

佐藤強三郎

信哉「今日は宿で寝ころんで休みましょう」と云つて、新聞など見てくつろいでいた。朝、一寸海へ遣入つた位のものである。お藤も、せんべいや、アイスクリームを食べて婦人雑誌など見ていた。夕方お藤は、「家へ帰りたい」と言ひ出した。

信哉「そうですか。柏原の家へ帰つて、気楽に暮せそうですか。よく考えて見て下さい」

お藤にしずかに語り出した。

お藤「わたしはあの人と結婚する前に、一年も互に交際しました。あの人は土地の商業学校を卒業し、家柄も良く、人も善良だが、只少々気の弱い所のある人だと考えました。その頃、周囲の人もお友達も、満点の人は無いものだから辛棒して、あそこへお嫁に行きなさい、と勧めてくれましたので、廿一の春に嫁いだのでございませう。そうしている内に、主人は直江津のあの女に心ひかれて、しげ／＼と通う様になりました。それでも私は三年位も辛抱していました。その間、時々、一ヶ月位も病氣にかずけて、里へ戻つていたこともありましたが、そこ

で実母にはげまされ、慰められて、また婚家へ帰りまし
た。その時の心構は、今度こそは夫を大事にし愛情を
もつて仕えよう、と云うのでした……。主人は時々両親
に呼ばれて意見されていた様ですが、直江津行は、益々つ
のるばかり、そこで私は覚悟しました。……八夫を救う
ものは私より外には居ない。父母の愛も、夫を救うこと
は出来ないのだ。……と。それがらなお一層忠実に仕え
ました」

これを聞いて真顔になつて来た信哉は、

信哉「そうですか。夫を救うものは、自分より外にない、
とお考えになりましたか」

お藤「そうです。夫を救うこそ、自分の生きる甲斐だと、
考へました」

と、キツとなつて信哉を見上げた。が、また、うなだれ
て、次第々々に頭を下げ、

お藤「然し、疲れては里へ帰り、里で静養して気を取り直
しては又店へ戻り、こんなことを繰り返し／＼している
うちに、私は精も根も尽き果ててしまいました。私がど
れ程、献身的に仕えても、お小夜さんとの仲は、切れる
所か、ます／＼つるばかり、丁度火に油をそそぐ様に
燃え盛つて行く様でした。

時々たまりませんから離婚しようかとも思いましたが、

る根性が知れぬ。……と云う親類も出ました。

私は献身的に誠意をつくして来ましたが、に尽せばつくす
ほど、誤解され、非難されるばかりです。それを聞いて、
電氣に触れた様に驚きました。世の中は誠意を以て
すれば、誠意を以て答えられるし、感謝を以て尽せば、
感謝で報いられるとばかり信じて来たものが、意外に
も、八誠意に対しては悪意を以て返されたのです。……
いかに弁解しても通じない。やればやる程誤解を深かめ
るばかりです。

……私のこの世に於ける真剣の唯一つの誠意、それ一つ
すらも認めて貰うことが出来ないのです。

……神も仏も無い世の中です……。私はどうすればよい
のでしよう。全く孤独の淋しい人生です」

信哉「そうでしょう。たしかにそうですね。ほんとうに自
分の誠意を素直に認められぬ事ほど、残念なことはあり
ません。淋しい事です。弁解すればする程誤解されるの
は実に残念です。身も世もありません。私もその経験が
あります」

と言葉を切り、黙り込んで下を向いた。

お藤は、オヤ、と思つて顔をのぞき込むと、信哉の眼に
は、キラリと光るものを見た。お藤は電光に打たれた様に
眼がくらんだ、黙っている。信哉は鼻をつまらせ忍びに忍

かつては可愛がつてくれた主人ですもの、そう簡単には
別れられるものでありません。一旦夫婦となつた以上そ
の強いきづなは、そう容易にはたち切れません」

信哉「離婚をどうして、思い止まりましたか」

お藤「この縁談は、人に強いられたのでなく、しばらく交
際してから、自分でよく考えて定めたのです。……自分
に責任があるのです。」

信哉「よく真面目にお考になりました。責任は自分にあり
ますね」

お藤「自分が自由に選択して定めた縁組を、後で失敗した
からとて、この結婚を御破算にして、又別に自分が自由
に選んで定めても、それが絶対間違いなく行くかと思つ
とき、必ずうまく行くとはい保証がつけられません。結婚
に自信が無くなつたのです。本人の自分が見立てたのに
自信がないのですから、他人の選んだものは、尚更保証
がつかねます。」

信哉はいよ／＼真顔になつてきいていた。

信哉「実に理路整然と、よく御考えになりましたね」

お藤「そのうちに、親類から……。八あの嫁は財産を目当に
頑張つているのだ。……と、そろ／＼非難の声があがり
始めました。また……。八あんな親切ごかしは止めたがよ
かるう。あれ程嫌われながら、あんなにへばりついてい

んでいたが、遂にハンカチを眼に当てた。

お藤「どうかなさいましたか」

と聞えど黙っている。やがて

信哉「いや別に、……。自分の誠意を誤解され軽蔑されるほ
ど、くやしいことはありません」

と、下を向いた。お藤は、見たこともないものを見た。
そして心に思つた。八この人は私が苦しんだと同じ様に、
苦しんだのであろうか。同じことを思っている人なのだろ
うか。そうに違いない。……と。

改めて眼を据えて、信哉の顔を、チーと見つめた。あま
り真剣な眼ざしに、信哉は居すまいを正して、座り直し
た。まだ、お藤は眼を離さない。

お藤「貰方様もこんな苦しい御経験がお有りでしょうか」
信哉「ええ、私も誠意に対して悪意をもつて報いられまし
た。くやしいことです。腹が立ちました。悲しいことだ
す」

屋敷後信哉はまた一人で海へ出た。信哉はお藤がこの宿
へ来てから、毎日／＼柏崎の婚家へ電話して、色々連絡を
とることを決して忘れなかつた。

一週間目に、信哉は「どうしますか」と聞けば、お藤は
「店の方で許してくれるならば、もう少し此所に居たい」
と答えたので、その様にした。

十日程してお藤は「あなた様は、いつ頃までこの宿に御滞在ですか」ときいた。信哉は「今月一ぱい居る積りです」と言えは「それじゃ、まだ二十日もありますね」と笑った。ところが、その翌日、急に

お藤「今日、午后、帰りたいと思います。私が貰方様にお会いしたい時は、いつでも、お会い下さるでしょうか」信哉「いつでもこの宿でお待ちしています。御遠慮なくお出下さい。御両親は、そのことならいくらでもお許しになりましょう。今日は一人で帰られますか。どこへも行かず、必ずまっすぐに自宅へお帰りなさい。たのみますよ」

と云つて、帰るときには駅まで送つて行つた。お藤の汽車が出発するや、すぐに至急電話で柏崎の婚家の父親と話をして、是非共駅までお藤を迎えに行つて下さいと、依頼した。

お藤は駅でお父様に迎えられ、無事我家へ帰つた。お母さん、一郎さん始め皆はよろこんで迎えた。そして家中の者は、腫物にさわる様にみんなで気をつけた。お藤はそれが嬉しいやら、恥ずかしいやら、氣まりが悪いやらで、仲々落着かなかつた。

二三日経つて、親類の娘が来て、お藤に「私も直江津あ

「仲人口が、また出鱈目なのがすくなくない。見たと聞くとは大違い。そんな時はサッサと解消して、また新しい相手を見付けた方が良くと思うわ」

「女は一度離婚すると古物と云われて、後の結婚に非常に損をする。そこへ行くと、男は二度目でも、三度目でも、いくらでも処女と結婚が出来るから大いに得をする。どこまでも男女不平等ね」

「封建性を打破するには、女が経済的に独立しなければ出来つこない」

等々と云えは皆は互に顔を見合せてためいきをついた。

「私は財産家の後家に行きたい。先妻の子が居なければ一番良い。主人が亡くなつても財産が残つていれれば老後の心配がない。年がいくら違つても、外に若い燕を見付ければ楽しみに事は欠きませんものね」

とまで言う人もいる、この人は飲食店で働いていると云う。お藤は黙つて聞いていたが早目に一人で座をはずした。帰り途にまた知合のお婆さんに会つた。

婆「御商売に精が出ますね。感心ですこと。近頃のお嫁さんは悪いですね。二言目には八私は親の所へ来たのではないVとにらみ返す。本当に親が小さくなつてはいるばかりです。ハイ、イヤハヤ」

と長話が早く帰りたいので氣がもめて、

たりで十日も楽々と海水浴がしてみたわ」と言つた。お藤は、ハッ、と思つて、身体がぶる／＼と震えた。……八楽々と海水浴とは何事であるう。やつぱり、私は皆に、そんな風に思われているのかV……と涙が止めどなく流れ出るのをどうすることも出来ない。下を向いて、サッサと奥へ引込んでしまつた。

信哉と店との緊密な打合せと、注意深い取扱いとのために、今回の事件は全然外部へは知れなかつたのであつた。ある日、お藤が店の用事で町へ出た時に女学校時代の友人に会つた。そして「学校の同窓会の相談があるから」と誘われてその家へ行つた。もう六七人集つていた。総会に出る前に、何かと下相談をしているのだ。

「今度の総会では、封建制度の批判、というのがある。今は民主憲法が出来て、封建制は打破されている筈なのに、まだいくらでも残つている。家長などが威張つていて、嫁などは給料なしの女中位にしか取扱われていない、若夫婦など、意見の出しようがない。出したところが頭からはねつけられてしまふだけだ」

「自分の子供でも、自分勝手に思う様に育てられぬ。家の者が勝手にお守しているので母親に懐かないで困る」

「法律なんか駄目ね。只婚姻に親の承諾がなくても、廿歳過ぎると自由になつたのがありがたい位だわね」

お藤「お婆さんお達者でお寺詣りも出来るので結構でございますね。店の用で急ぎますからこれで失礼します」

と、やつと逃げた。

(続く)

薬童子

医王耆婆が病人を治するに、雪山から薬草を採つてきて童子を作ります。その形は非常に立派で世にも珍らしいうえに、生れたばかりの童子のようで、しかも行住坐臥が自在であります。

病人が来ると先ずこの薬童子と遊ばせます。病人のうちでもすこし力のある者は、この童子と共に行きつどもどりつ戯れるが、歩行の出来ないで坐つている病人にはともに坐り、寝たきりの病人には薬童子は抱かれて遊びます。

こうしているうちに、薬の効が病人にあらわれて病が自然に平癒するのであります。どういう薬草で作つたのか分りませんが、薬童子と戯れる病人は自然にその利益をうけて、どんな重病も治らぬものはありません。

これは宝積経にある譬であります。南無阿弥陀仏の名号もこの薬童子と同じで、行くも帰るも、寝てもさめても念佛する者は、無明の難病が治されてゆきます。



あとがき

寒い長い冬も、春光に消えて、彼岸の好季となりました。初蛙の声もほどなく聞えるあります。

橋杭に目高かたまる春の川 古灰師

さて二月号も三月号も刊務所印刷部の方に支障がありました非常に発送がおくれ、皆様に御心配おかけいたしましたし申し訳ありません。十四年間、こんなことも無かつたのですが、印刷係の方も種々御苦勞をして下さっていることとて、御諒承願います。

最近は交通事故防止で大変であります。ここ数年の名古屋市の変化も驚くばかりであります。京浜、阪神の地区はなおのことでありましょう。それにつけても、

「米国の東海岸のバスの中に、ゆううつな顔を大きくのせた広告が出ています。よく見ると「米国には六百万人のノイローゼ患者がいる。これをなす道は、あなたがこの人を理解してあげることだ。ニューヨークの下記住所に葉書を出さすれば、そのためのパンフレットを送る」というノイローゼ対策委員会の広告です。米国のような国でなぜノイローゼが社会問題にまでなるかはまた別の興味ある問題として、とにかくノイローゼも、それをなおすものは、注がれた愛情であり、それに患者が目ざめるという大変簡単なが、また同時にむずかしい事実以外はないようです」

と教養文庫に出ているのを見て、種々と考えさせられます。世の中をどうするのさうすびのし、心光の照護を被ることの一刻も早かれと念じられてなりません。

ともしびをたかくかゝけてわがまえをゆくひとのありさよなかのみち 甲斐女史
聖人の恩徳を瞻仰された一首であります。太陽が西に沈みます時、星や月のひかりがきら／＼と輝きますように、社界や家庭に暗闇がおもう時、きびしい世相に入るとつれて、いよく聖人の偉業に心うたれますこととであります。

御案内

毎月一、二、三、日曜、午後一時半。一
道会館。日曜例会。市電、新郊通り一丁目
下車、東へ一丁半北側。

毎月廿四日午前、午後、市内昭和区小椋
町教西寺、法話会。市電、御器所通下車

執筆者御住所

東京都世田谷区上北沢三ノ一三一二
福島政雄

新潟市関屋堀割三丁目十一
佐藤強三郎

島根県温泉津町井田

三瓶徳英

定価一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町三ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番